

能界展望(平成十一年)

ニシノ, ハルオ / 西野, 春雄

(出版者 / Publisher)

The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University /
野上記念法政大学能楽研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Nogaku kenkyu : Journal of the Institute of Nogaku Studies / 能楽研究 :
能楽研究所紀要

(巻 / Volume)

25

(開始ページ / Start Page)

163

(終了ページ / End Page)

178

(発行年 / Year)

2001-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020554>

能界展望（平成十一年）

西野 春雄

概観

二十世紀も終わり近く、二十一世紀の夜明けを目前にした平成十一年（一九九九年）の能楽界は、比較的平穏な一年だった。大家・中堅、そして若い人達の活動も活発で、より広い観客層の拡大にむけての動きも見られた。ともすれば閉鎖的になりがちな能界の現状に危機感を抱いた若手能楽師たちが「能を次代に残すには、より広く親しまれるための努力が必要」と積極的に活動しはじめたことは喜ばしい。数年前に小鼓方の大倉源次郎氏が結成したグループ〈ツクスマ〉が先駆的な活動を展開してきたが、続いて東京のシテ方・囃子方5人の〈神遊〉（一九九五年結成）、中京・関西で活動するシテ方・囃子方・狂言方5人の〈能楽「鏡座」〉（一九九六年結成）、金春流若手4人の〈金春流座・SQUARE〉（一九九八年結成）が旗揚げし、先輩たちも応援している。

先人たちが何百年と演じ続けてきた作品に挑戦する舞台活動もあれば、能や狂言が現代に生きている証しとして新作能や復曲能、あるいは新作狂言に挑む舞台もある。新作ではここ数年宗教者に取材した作品が目立つが、今年もこの傾向が

見られた。現代人は、能や狂言がもっている心の癒しを求めているのだろうか。

一方、今年年中行事と化した趣の海外公演に目をやれば、欧米のほかに、宝生流中国公演や鍬仙会メンバーによる韓国公演、同じく山本東次郎ほかによる韓国での「三番三」上演など、アジアでの公演も目立った年であった。アジアの時代が到来したか。

国立能楽堂特別公演では昭和60年以来、実に十四年ぶりに黒川能が上演された。前回は三日間にわたる公演だったのに、今回は一日を三部に分けての強行日程で、疲労の度も限界ではと懸念されたが、みごとに演じ終え、五流の能とはまた別のおおらかな舞台に触れることができたのは嬉しかった。

能界過去帳を繙けば、栗谷新太郎・岡次郎右衛門・川瀬一馬氏ほか、能界・学界で多年にわたり斯界の発展に尽くされた長老たちを見送らねばならなかった。詳しくは物故者の欄をご覧ください。

以下、文字どおりの管見で、しかも関東地方に傾きがちで恐縮ではあるが、平成十一年の能楽界の事象や出来事を、記録を中心に概観し、二十一世紀も間近い能界を展望する。

国立能楽堂関係

【能楽三役の後継者養成ほか】

昭和58年9月の開場以来十五年余、国立能楽堂の事業は、企画・制作側のたゆまぬ努力と、演者および関係者の協力によって、順調な歩みを重ねて来た。しかし、近年の国立能楽堂の活動は、残念ながら王道を歩んでいるようにはみえない。諸制度も時代とともに見直しが必要であることは承知しているが、創立時の精神をどこかに忘れてしまったように思われる。抽象的な記述では論評にならないが、そういう空気が感じられることを、まず指摘したい。

常に、国民のための劇場であることを肝に銘じて、これまでの軌跡を踏まえつつ、安易に陥らず事なかれ主義に流れず、芸術を愛し芸能を楽しむ原点に立ち返って、たとえ困難でも、創造精神豊かな舞台の実現に尽力していただきたいと思う。

国立能楽堂の根幹事業であり対策が急がれていた能楽三役後継者の養成事業は、講師の方々の献身的努力と研修生諸君の精進によって、現在十数名がプロとして就業している。平成11年度からは第6期生の研修に入った。適性検査で七名が選ばれたが、現在、笛一・小鼓一・太鼓一名、の三人が日夜稽古に励んでいる。それぞれ道は遠く険しいが、独立を許され活動している先輩たちに続くよう、エールを送りたい。

【企画公演の中から】

《復曲・再演の夕べ「浦島」と「多度津左衛門」》

4月22日。「浦島」シテ浦島・野村小三郎、アド孫・森智一、小アド亀の精・野村又三郎、地謡・松田高義ほか。

「多度津左衛門」乳母・大槻文蔵、姫・大槻一文、高野聖・山本東次郎、左衛門・宝生閑、寺男・山本則直。笛藤田六郎兵衛、小鼓大倉源次郎、大鼓柿原崇志、後見観世榮夫ほか、地謡阿部信之ほか。

筆者は「浦島」を河鍋晩斎の絵で見たことはあるが、舞台は初めて。捕らえられた亀を海に放してやる場面は橋掛りをうまく活用し、お爺さんの浦島太郎が玉手箱をあけると白煙りが出て瞬時に屈強の若者に変身する場面も意表をういて面白く、小三郎の演技・演出が冴えた復曲狂言であった。

世阿弥自筆能本が伝わる「多度津左衛門」は、昭和63年に大槻文蔵が復曲した作品で、筆者は初演も、東京での再演も三演も見ている。今回は詞章の省略も含め、演技・演出がますます洗練され、地謡も阿部信之を地頭とする鍬仙会系のドラマチックな謡が劇的緊迫感を表現し、諸役の息も合い、見事に現代によりみがえらせた。

《黒川能特別企画公演》

雪国の秘事能として知られる黒川能の東京公演が、8月29日、十四年ぶりに国立能楽堂で催された。ご承知のように、黒川能は室町後期から山形県東田川郡櫛引町大字黒川の春日神社の神事に宮座の人々が伝え演じてきた猿楽能である。氏子は上座と下座にわかれ、能の座も上座と下座にあり、それぞれ能太夫が統括している。

前回の東京公演は、昭和60年、国立能楽堂秋の特別公演で三日間であったが(筆者はすべてを鑑賞)、今回は種々の都合によるらしく一日のみの公演で、次の三部構成をとった。

第一部(午前10時半開演)は「式三番」に能「嵐山」(間狂言は猿轡)。第二部(午後2時開演)は能「海士」、狂言「蟹山伏」、能「龍田」。第三部(午後6時開演)は能「鈴鹿山」、狂言「附子」、能「現在熊坂」、祝言「淡路」。

一日に三部構成の番組という、かなり超過密な強行スケジュールは気の毒であったが、それにもかかわらず、太夫以下全員、汗だくになりながらみごと勤めあげた心意気と、舞台に対する真摯な姿勢は、信仰に支えられて生まれた猿楽能の原点に接する思いであった。黒川能にのみ伝わる「鈴鹿山」「現在熊坂」ばかりでなく、五流と同じ作品も面白く、特に親子恩愛の絆を描く「海士」など深い感動を覚えた。伝承・後継者の問題、国の減反政策と専業農家の激減、祭りを取り巻く生活や環境の変化など、いろいろ困難な課題があると思うけれども、現象と本質を正しく認識し、知恵をだしあい、なんとかして正しい形で守り伝えていってもらいたいと切に願う。

【'99特別展示】

《戦国時代の能》 11月12日～12月17日。「能の歴史シリーズ」の一つ。「世阿弥―その生涯と業績」(昭和59年度)、「金春禅竹―人と業績」(昭和61年度)、「室町時代後期の能」(昭和62年度)、「桃山時代と能楽」(昭和63年度)に続く企画で、

久しぶりの歴史特別展である。戦国時代の能伝書や謡本、絵画、道具類、関連する芸能資料を通じて「不安に満ちた戦乱の一方で、下克上の活気ある時代でもあり、能役者も観客も大きなうねりの中で試練に耐え、新しい能を作り出し」た戦国時代の能について、理解を深めようという展示であった。

教材ビデオの制作と寄贈

京都能楽会と能楽協会京都支部は、能をできるだけ多くの人に理解してもらうために、教材ビデオ制作委員会(委員長・片山慶次郎氏)を組織し、『能の教材ビデオ』二巻「入門みちしるべ 能とはどんなものか」「鑑賞みちしるべ 能『井筒』(短縮版)」を制作し完成させ、平成11年3月、京都府および京都市にある公立・市立のすべての高校・中学校三〇〇余に無償配布した。このような試みはこれまでなく大英断である。ビデオは学校の授業時間に合わせたため、それぞれ39分に短縮せざるを得なかった由であるが、とてもコンパクトにまとめている。一般にも頒布しているので入手可能。

イギリスでは中学や高校のカリキュラムにシェイクスピアの戯曲が生まれ、実際に演技術も学ぶという。日本が育んできた舞台芸術『能』の世界を若い人達に紹介すべく、困難を乗り越えて学校向けの教材ビデオを制作・完成させた関係者の努力に心から敬意を表したい。

今後は学校側の活用に委ねられるが、片山慶次郎氏「演者の座より―ビデオ制作のアフターケア―」(『能』平成11年6

月、京都観世会発行)によれば、学校側の反応がいまひとつのようである。長くなって恐縮であるが左に引用したい。

(略)これはあまり云うべき事ではないのであるが、府下の中・高へ送って単独で受け取った礼状が来たのがたったの二通なのである。中学校から一、盲学校から一。それだけにこの二通には感激した。殊に盲学校の場合、「日本音楽史の時間に活用させて頂きます」とあった。嬉しかった。礼状がほしいとは云はない。目的はどれだけ活用してもらえるかである。然し、どう考えても受取り状も出さない学校が、宿題をして来ない生徒に、それを叱る資格があるのだろうかという想いは消せない。

返事の有無のみでとやかく云うのは早計とは思ふけれど、同時に能というものが学校社会の中で、如何に縁遠いものであるか、今後これに対するに我々能役者はどの様な認識で対処してゆくべきなのか、日本の古典、殊には古典芸能を若者達の心の一隅に映し置く事の難しさを、むしろ我々の今後の一大事として捉え直さねばと痛感するのである。能にはいいところがありますよ、まづは触れてみて下さいと、いろんな方法で易しく問いかけ続けねば、それがこれからの仕事であると思ひ直している。

同感する人も多いと思う。指導する側の教員への働きかけが急務なのだ。二〇〇二年からは中・高の教課の中に、能・狂言を含む古典芸能や邦楽が取り上げられる。楽器を手にする時間も生まれる。その時になって現場の先生方が困らないよ

う、もう対策を検討し始めた教育委員会もあると聞いている。最近、この教材ビデオの英語版も完成したそうで、海外の学校へ贈られる日も近いことだろう。

ナショナルに徹すればインターナショナルに通ずる。日本の若者が中学・高校の時から日本の文化や芸術、特に能楽に親しむ機会を積極的に作っていくべき時である。

さまざまな催しから

能楽諸流派の活動の中心たる月並能・定期能をはじめ、襲名披露能・独立記念能・追善能、あるいは全国各地での薪能という名の野外能、劇場やホールでの能、近年流行しだした蠟燭能、新作能や新作狂言の続演など、平成十一年も各種各様の催しがあった。ここでは、その一部を紹介する。

《梅若恭行「関寺小町」》

5月12日。梅若先祖祭。国立能楽堂。「関寺小町」シテ梅若恭行、子方柴田昂徳、ワキ宝生閑、ワキツレ宝生欣哉・殿田謙吉、笛藤田大五郎、小鼓噌和博朗、大鼓安福建雄、地謡梅若六郎ほか、後見観世清和・観世喜之。

最奥秘曲「関寺小町」は十年に一度上演されるかどうかの大曲であるが、八十一歳の梅若恭行が「関寺小町」を演じ、これで「檜垣」「姨捨」とともに三老女を舞い終えた。筆者も老いの極みの痛ましい姿を凝視した一人だが、「朝日新聞」の能評に多田富雄氏は「演技超えた時間の劇が現出」との見出しで「満天の星の下で老女が無心に舞っている。杖に

すがった腰は曲がり足もともおぼつかないが、老いの彼方から人生を見据えたようなふしぎな、ものすさまじい舞いである」と書き出している。そして批評の筆を進ませ「時の巨大な流れが舞台を支配し、時間の記憶のような老女が藁屋に座って泣いた。謡が止めたあと、大小鼓と笛が静かに残り止めの手を奏し、秘事を連ねた二時間に及ぶ老女の劇は終わった。橋掛かりを静かに去ってゆく老女の杖の音に、観客は死んだ時分の祖母や母の姿を重ね合わせて、女の一生を思ったに相違ない」と結んでいる。平成十年には金春信高が金春流としては四十一年ぶりに演じたが、宝生・金剛・喜多流は戦後に一度もない。伝承が途絶えないためにも、しかるべき役者による上演を鶴首する。

【新作能・新作狂言・復曲能の動き】

昨年に引き続きこの年も新作能や新作狂言および復曲能の上演があいついだ。題材面で、道元禅師の『典座教訓』に取材した新作狂言「椎茸典座」など、昨年と同じく宗教者をテーマにした作品が目立った。また、謡が流行した江戸時代には、全国津々浦々で地元の景勝や神社仏閣、あるいは郷土の偉人や伝説に取材した、いわゆる「所謡」(郷土謡・お国謡)がたくさん作られたが、こうした作品のいくつかが現代によりがえった例もある。以下、主な公演を列記する。

①新作能「法螺侍」

5月11～14日。新宿狂言。全労災ホール・スペースゼロ。「法螺侍」高橋康成作。出演・野村万作・野村萬斎ほか。四

日連続公演で、狂言「茶壺」と併演。「法螺侍」はシェークスピアの戯曲「ウィンザーの陽気な女房たち」の翻案作品で、一九九一年の初演以来、続演されている。能舞台よりもホールが似合うようである。

②復曲能「高良山」と新作能「額田王」

6月5日。久留米薪能。久留米市中央公園特設舞台。「高良山」能本作成堂本正樹、作曲演出大槻文蔵。シテ大槻文蔵、ツレ竹富康之、ワキ宝生閑、ワキツレ宝生欣哉、アイ山本東次郎・山本則俊・山本則孝。笛藤田六郎兵衛、小鼓飯田清一、大鼓白坂信行、太鼓金春国和、地謡阿部信之ほか。狂言「呼声」山本東次郎・山本則俊・山本則孝。「額田王」能本作成馬場あき子、作曲演出観世榮夫。出演、山本順之、梅若六郎、観世榮夫、観世元伯、笛藤田六郎兵衛、小鼓大倉源次郎、大鼓亀井広忠、観世元伯、地謡大槻文蔵ほか。普通の市民がよいものに接したいと願い、柿原紗千子氏を代表とする市民グループが、行政の力も借りず企業のスポンサーもなく、一口千円で会員・協賛者を募って企画・実現し薪能で、筆者も鑑賞。地元の主婦グループの情熱とパワー、それに応えた役者たちの心意気と尽力でみごと成功を収めた。「額田王」は一九九七年に国立能楽堂が制作・初演以来、地方初の上演。

③新作狂言「椎茸典座(しいたけてんぞ)」

6月7日。東京プリンスホテル。道元禅師生誕八百年記念慶讃の新作狂言。道元禅師の渡宋の折りのエピソードに取材。網谷正美作、主演茂山千作。笛帆足正規。初演は永平寺。続

いて東京・大阪で上演。以後、仙台・天童・松江など、全国各地の曹洞宗の集まりで続演されている。

④新作狂言「維盛」と新作能「望恨歌」

7月6日。〈反核と平和のための能と狂言の夕べ〉。国立能楽堂。新作狂言「維盛」茂山千之丞、茂山あきら。新作能「望恨歌」シテ観世榮夫、ワキ宝生欣哉、アイ大島寛治、笛杉市和、小鼓大倉源次郎、大鼓山本哲也、地謡山本順之ほか。いずれもこれまで上演を重ねてきた新作で、「維盛」は帆足正規作。「望恨歌」は多田富雄作で初演は橋岡久馬。

⑤新作能「鷹姫」の改訂上演

7月20・21日。大阪・阿倍野の近鉄アート館能第十回記念特別企画。プロデュース大倉源次郎。初日近鉄アート館、二日目名古屋能楽堂。作横道萬里雄、作曲作舞観世寿夫、演出大槻文蔵、謡曲指導観世鍔之丞。配役、老人・観世曉夫、鷹姫・赤松禎英(名古屋は山本博通)、空賦麟・福王和幸、岩・阿部信之ほか。笛藤田六郎兵衛、小鼓大倉源次郎、大鼓山本哲也、太鼓三島元太郎。一九六七年の初演以来、最も多く演じられている作品であるが、今回は大槻文蔵が初めて演出。

従来の枠組みを残しながら現代的な要素を加味した改訂版で、劇場と能舞台それぞれの機能を生かした新演出で挑戦。詳細は演出者の弁を載せ「日本経済新聞」平成11年7月25日、日曜版の記事も転載している『華通信』17(平成11年9・10月号、(有)大倉発行)を参照されたい。

⑥復曲能「護法」と能舞「相聞」

9月25日。藤田家三百七十年・藤田六郎兵衛舞台四十年記念花伝の会特別公演パートⅡ。名古屋能楽堂。「護法」堂本正樹台本、梅若六郎演出。囃・茂山千作、山伏・野村萬斎、護法善神・片山九郎右衛門、笛藤田六郎兵衛、小鼓噌和正博、大鼓白坂信行、太鼓観世元伯、地謡片山清司ほか。名古屋初演。芥川龍之介の詩による能舞「相聞」は、観世榮夫の初演以後、かなり上演を重ねているもので、舞を観世鍔之丞、笛藤田六郎兵衛、小鼓福井啓次郎、大鼓河村眞之介、地謡大槻文蔵ほか。

⑦復曲能「婆相天」

10月9日。上越市能。上越文化会館大ホール。「婆相天」永島忠修(母)、鶴沢光(安寿)、坂真太郎(厨子王)、観世喜正(婆相天)、森常好(問左衛門)、石田幸雄(東船人)・深田博治(西船人)。笛寺井義明、小鼓北村治、大鼓柿原光博、地謡長沼範夫ほか。安寿と厨子王の物語が語り伝えられて来た上越市での復曲演。市民グループの情熱と実行力、それに応えた役者たちの力で実現した。東京での再演も予定されている。

⑧復曲能「諏訪」

10月10日。長崎諏訪の杜薪能。諏訪神社。「諏訪」清水寛二、清水蓮太郎・清水伽那、村瀬純、山本則直。笛吉岡望、小鼓飯田清一、大鼓柿原弘和、太鼓小寺佐七、地謡観世曉夫ほか。同曲は寛文12年(一六七二)に諏訪神社二代能大夫早水治部が、官命(当時の長崎奉行は牛込忠左衛門勝登)によって作ったとされる。平成9年5月に東京で復曲上演され、翌年

10月の長崎ブリックホール柿落公演で再演、今回が一四二年ぶりの里帰り上演となったのである。

⑨ 新作能「関白一条教房」

10月22日。一条家薪能。土佐中村市・一条神社。原作・林田浩二、作曲演出・河村信重、アイ作詞・野村万之丞。シテ河村信重、ワキ原大、アイ小笠原匡・野村晶人。笛左鴻雅義、小鼓清水皓祐、大鼓守家由訓、地謡田茂井廣道ほか。これも土佐中村に伝わる伝説の舞台化である。翌年、京都でも再演。今後、新作・復曲を問わず、地方の伝説に取材した作品が上演され、埋もれていた名曲の復活につながる可能性もあると思われる。

⑩ 新作狂言「藪の中」

10月25日～27日。伝統の現在スペシャル。東京渋谷のシアターコクーン。原作芥川龍之介、脚色・演出野村萬斎。出演、茂山五郎、茂山千作、茂山千三郎、野村万作、野村萬斎、石田幸雄。「木こり、坊主、放免、……いちがう証言が青年を迷宮に誘い込む」「時空を超えた推理劇」で、野村萬斎は平成11年度文化庁芸術祭新人賞を受賞した。

⑪ 新作能「実朝」と新作能「蛙ヶ沼」

11月6日。第10回能劇の座記念公演。「実朝」高浜虚子作・堂本正樹補綴・野村四郎節付(初演演出)・梅若六郎演出。実朝・梅若六郎、旅僧・高井松男、銀杏の精・野村良介。笛松田弘之、小鼓大倉源次郎、大鼓柿原崇志、太鼓金春国和、地謡野村四郎ほか。

「蛙ヶ沼」堂本正樹作、大槻文蔵節付・型付・演出。男・蛙の精・大槻文蔵、アポロンの巫女・福王和幸、老蛙・茂山七五三、里人・茂山逸平。笛竹市学、小鼓清水皓祐、山本哲也、地謡阿部信之ほか。

「実朝」は土岐善麿作の喜多流の現行曲が知られているが、高浜虚子が大正八年に発表した同名異曲もある。平成八年に堂本正樹が補綴し野村四郎の節付・演出で野村四郎が初演。その後も野村が再演し、今回、梅若六郎が演出し初演した。

「蛙ヶ沼」は堂本十六歳の時の書きおろしという。五十年の後、大槻文蔵の演出で上演されたもの。これより前の8月21日に大槻文蔵の会が初演で(於・大阪)、能様式による創作劇ではなく、きつちりと能の構成や様式を踏まえた新作能でありつつ、シテの面・装束の工夫や、ワキの役を旅する巫女としたことや、蛙となった祖父と人間の孫の意志疎通の悲惨さを笑いのうちに表現した間狂言や、地謡の工夫(とくに地頭みの独唱部分)と、水平の沼を立方体で表した作り物の発想など、大胆・斬新な演出が光った作品であった。

⑫ 新作能「ジゼル」

11月29日。梅若六郎の会特別公演。東京、サントリー大ホール。企画・総指揮・演出梅若六郎、翻案・演出山本東次郎、脚本水原紫苑ほか。出演、梅若六郎・宝生閑・山本東次郎・松田弘之・一噌幸弘・大倉源次郎・亀井広忠・助川治ほか。ロマンティックバレエの名作《ジゼル》の劇化。「伽羅沙」「空海」に続く新作能三部作の締めくくりという。

展示会の盛況

平成11年も各地で能楽関係資料の展示があいついで開催された。これらは一般社会への能楽の広がりを示すものであろう。それぞれ工夫され、質の高い展示もあり、⑨など空前の規模であった。主な展示を左に記す。

①《能にみる日本の女性展 能面・能装束の美》

2月2日～3月22日。愛知県愛知郡長久手町の名都美術館。標記のごとく日本の女性を題材とした能と、能面・能装束を中心に約一〇〇点を紹介展示。期間中、講演会(五回)と展示解説(二回)があった。伝統文化フォーラム・山口能装束研究所ほかの後援。

②《特別展 能のおもて》

3月30日～5月30日。兵庫県篠山市の能楽資料館。中西通同館長の『能のおもて』(玉川大学出版部)の出版記念展。

③《シルク博物館特別展 華麗なる能装束の美》

4月10日～5月16日。横浜市のシルク博物館。「文化の伝承—江戸から現代へ—」がテーマ。山口能装束研究所ほかの協力で、江戸時代の装束や復原された装束、養蚕、復原工程など、能装束をとりまく様々な要素を紹介。会期中、講演会も行われた。

④《片山家能楽保存財団 第三回 能装束・能面展》

8月1日～3日。京都文化博物館。今回は、新発見の大光坊の真作「飛出」が特別展示され、話題を呼んだ。幻の作家

大光坊の真作たる「飛出」については、田邊三郎助氏「面打ち・大光坊幸賢と近江井関」(『月刊文化財』平成11年4月号)、及び見市泰男氏「新発見の大光坊作「飛出」について」(『観世』平成11年7月号)が詳しい。

⑤《伊井家伝来能面 翁・尉展》

9月23日～10月19日。彦根市の彦根城博物館。室町時代の古面から江戸時代の世襲面打ち家の作品、大正昭和期の現代作家の作品まで22点を展示した。

⑥特別展《沼名前(ぬなくま)神社能舞台をめぐって》

10月10日～11月23日。福山市の鞆の浦歴史民俗資料館。テーマは「能に夢中の秀吉から」で、沼名前神社の能舞台は秀吉が伏見城に設けた組立式の能舞台を移築したものと伝え、重文に指定されている。能面・画像・文書など多数を展示した。

⑦《花の風姿幽玄の美 能—面・装束—展》

10月16日～11月14日。奈良県立美術館。東京国立博物館・大倉集古館・永青文庫ほか所蔵の能面・能装束・文書を展示した。装束展示に工夫がなされ、充実した展覧会であったが、折から開催中の正倉院展に人が集まり、すいていたのは残念。期間中の10月31日は、東京国立博物館の長崎巖氏による講演「能装束—その歴史と美」があり筆者も聴講。とてもわかりやすくなった。講演だった。

⑧《吉野の古面展》

10月17日～12月12日。奈良県吉野町の吉野歴史資料館。以

前は勝手神社所蔵で現在は吉水神社所蔵の「山姥」「平太」など13面ほかを展示。

⑨秋の特別展《光悦と能—華麗なる謡本の世界—》

10月29日～12月1日。熱海市のMOA美術館。構成は、I「光悦謡本への道」、II「光悦謡本の世界—光悦謡本と嵯峨本—」、III「光悦とその周辺」(黒雪謡本・金銀泥料紙装飾・光悦謡本の周辺・蒔絵・書状)、IV「光悦謡本の影響と展開—玉屋本と元和卯月本系謡本—」からなる。多芸多才な光悦の仕事のなかでも「謡本」に絞り込んだ特別展示で、館蔵品だけでなく他機関所蔵の優品ほか合わせて約一二〇点を出品。資料の質の高さと量の多さは近年にない展示。美術と文芸が織り成す交響楽を聴くような趣きだった。

海外公演

もはや年中行事と化した趣のある海外公演であるが、この年はこれまでの欧米中心とは別に、中国や韓国などアジアでの公演が目立った。二十一世紀はアジアの時代、の予兆なのだろうか。各公演の概要を左に略記する。

①《南京で昆劇と交流》

3月17・18日。中国江蘇省南京市の南京大学。野村万作一行。昆劇の名女優張継青氏と日中合作「秋江」を上演。ほかに昆劇「痴夢」狂言「二人袴」。日中合作「秋江」は先年野村万作が張継青氏と共演し話題になり、筆者も鑑賞したが(会場・国立能楽堂)、今度は中国での上演である。

②《第一回宝生流ニューヨーク定期能》

6月1・2日。メトロポリタン美術館のゲレース・レイニー・ロジャース講堂(初日)・国連本部の広場内の特設能舞台(二日)。世界芸術文化振興協会(IFAC)。会長・深見東州宝生流嘱託主催。能「石橋」(シテ宝生英照)、「藤」(シテ深見東州)、狂言「寝音曲」(柿山伏)。むこう二十年間にわたりニューヨークで定期公演を催すという遠大な計画の第一回目の由。内容は佐野登氏「ニューヨーク能公演」(『宝生』平成11年7月号)に詳しい。

③《宝生流中国公演》

8月3日。中国浙江省杭州市。浙江大学日本文化研究所創立十周年記念。主催・世界芸術文化振興協会(IFAC)。中国文化部推奨。宝生英照ほか。能「羽衣」狂言「棒縛」半能「石橋」ほかを上演。詳細は辰巳満次郎氏「中国公演に参加して」(『宝生』平成11年10月号)を参照されたい。

④《三番三 韓国公演》

9月5・6日。韓国ソウル市の韓国国立国楽院。韓国からの招聘による『世界無形文化祭』への参加公演。山本東次郎ほか狂言団。「三番三」三番三・山本東次郎(山本則直)、千歳・山本泰太郎(山本則孝)、寺井宏明、亀井俊一・住駒匡彦・横山幸彦、佃良勝(柿原弘和)。括弧内は6日の出演者。ほかに狂言小舞や素囃子など。主催は財団法人「韓国芸術総合学校発展基金」・韓国ユネスコ委員会、後援は韓国観光文化部・在韓国日本大使館。

⑤《能・狂言韓国公演》

9月26日～29日。韓国のソウルや慶尚北道安東、全羅北道全州で、能・狂言の野外公演とシンポジウムが行われた。公演は、能「羽衣」（浅井文義）、狂言「伯母ケ酒」（茂山千五郎）、能「石橋」（観世暁夫）。シンポジウムでは、能楽面と韓国の仮面の特徴の比較や技法の対比と、獅子の芸能の比較がテーマであった。

⑥《オムニバス能 ベルリン公演》

9月25・26・28日。ベルリンのルネッサンス劇場。村尚也演出、梅若万紀夫主演。オムニバス能「源氏物語―変妖―」。「源氏供養・半部・浮舟・野宮・葵上」より。祭典「ドイツにおける日本年―二十一世紀における日独の新たな出会い―」への参加作品の一つ。27日はベルリン芸術大学で仕舞と謡の実演等のワークショップ。主催・（財）東京都歴史文化財団。詳細は『橘香』平成11年10月～12年1月号を参照されたい。

武蔵野女子大学能楽資料センター公開講座

武蔵野女子大学能楽資料センターの月例研究会が、平成11年度から公開講座に昇格し、5月から11月まで下記の内容で行われた（8月は夏期休暇中のため休み）。

題目と講師はつぎの通り。「能を読む―キーワードをさがせ―」西野春雄（法政大学文学部教授・能楽研究所所長）、「寺院が育んだ芸能」高橋美都（武蔵野女子大学短期大学部講師）、「室町時代の謡と囃子」高桑いづみ（東京国立文化財研

究所芸能部主任研究官）、「現代に生きる能」山本順之（シテ方観世流能楽師）、「織田信長と能」秋山 駿（武蔵野女子大学文学部教授・芸術院会員）、の各氏。地元の市民が多数参加した公開講座で、今後とも定着していくことを期待したい。

法政大学能楽セミナー

法政大学大学院と能楽研究所が主催する法政大学大学院公開講座「第5回法政大学能楽セミナー」が《能楽百年 21世紀への贈り物》をテーマに開催。20世紀の能楽百年を総括し、21世紀を展望しようという企画で、五夜連続の講座。題目と講師は次の通りであった。

7月26日「明治能楽界の光と影」倉田喜弘氏（近代芸能史研究家）、27日「熱誠の人 池内信嘉」西野春雄（能楽研究所所長）、28日「謡曲大観と能楽源流考」岩崎雅彦氏（能楽研究所所員）、29日「能楽ルネッサンス」観世榮夫氏（能役者。シテ方観世流）、30日「新作能の未来」多田富雄氏（東京大学名誉教授。免疫学者）。それぞれの立場からの興味深い講演で、とくにゲストの倉田氏、観世氏、多田氏の発表は面白く、受講生も毎回百名を越え、一般市民の能楽への関心の高さを示した。

横浜能楽堂講座 能楽史事件簿

横浜能楽堂では、平成八年の開館以来、さまざまな講座を企画し、話題を呼んでいるが、この年も標記の講座が開催さ

れた。NHKの葛西聖司アナウンサーを探偵役に見立て、毎回ゲストに文化人一人・学者一人を迎え、資料のスライドなどを交えてトークショウ形式で楽しく能楽の歴史を学ぶ、という企画。全六回。題目と講師は左の通り。

9月12日「能に溺れる秀吉」(津本陽・表章氏)、10月3日「江戸はお稽古ブーム」(水原紫苑・竹本幹夫氏)、11月6日「能役者・写楽」(篠田正浩・表章氏)、11月7日「元禄繚乱 綱吉と能」(中島文博・竹本幹夫氏)、12月12日「維新に揺れる能役者」(山田智彦氏・西野春雄)、12月2月13日「義満、世阿弥を寵愛す」(馬場あき子・松岡心平氏)。テーマとゲストの人選など企画が当たったのか毎回満員の盛況であった。なお、この講座をまとめた横浜能楽堂編『能楽史事件簿』が平成12年6月、岩波書店から出版されている。

能楽ジャーナルの休刊

『現代能楽』のあとを継ぐかたちで、平成6年に発行され、唯一の能楽評論誌である『能楽ジャーナル』(編集発行人・堀上謙氏)が、第三十号をもって休刊した。能楽評論がやや低調な折りから、休刊は残念であり、休刊を惜しむ声も多いと聞く。

一方、時期を同じくして、新たに「古典芸能を楽しむ」新雑誌『DEN』(児玉信・竹下敏之・野村敏晴・森田拾史郎・渡辺紀子氏による編集・発行)が創刊された。能楽批評の専門誌ではないが、芸能を楽しむ雰囲気はあるようだ。

批評の衰退は芸能の衰退を招きかねない。明治・大正の先達に学び、「志」の高い雑誌の創刊を切に望みたい。(なお、『能楽ジャーナル』は平成12年1月に『新・能楽ジャーナル』として再出発し、たちばな出版から発行されている)。

襲名・家名復活ほか

【瀬尾菊次氏、桜間金記を襲名】

金春流シテ方の瀬尾菊次氏が四月、四世桜間金記を襲名した。初代金記は桜間右陣の次男で、明治の三名人の一人左陣(伴馬)の弟。伴馬の能には必ず金記がいる、と言われ、鐘後見の名手と称えられた人。金記の歴代と襲名の経緯などは桜間家能楽師系図などを掲載する『能楽タイムズ』平成11年9月号のインタビューと、襲名記念のパンフレットに詳しい。

【大鼓石井家の名復活】

大鼓方石井流の中村喜彦・保彦父子が、谷口正喜石井流宗家代と石井流一門の了解のもと、七月一日より石井に改姓し、ここに石井の名が復活した。挨拶状に同封の石井家系図によると、喜彦氏の祖父中村松次郎が、幕末から明治に活躍した石井流宗家石井孫兵衛景行(一斎。文政10年〜明治32年)の息傳太郎の次女ゆきと結婚。その子供の享道が喜彦氏の父。石井の家名復活については『能楽タイムズ』平成11年12月号の能楽対談に詳しい。

荣誉・受賞など

《春の褒賞・叙勲》 4月27日付

◎紫綬褒章 狂言方大蔵流 茂山千之丞氏。

《秋の褒賞・叙勲》 11月3日付

◎文化功労者 筑波大学名誉教授 小西甚一氏。

日本文学・比較文学研究の立場から、中世文学・和歌、能楽、漢詩文など幅広い研究で知られ、主著に『日本文藝史』『梁塵秘抄考』『能楽論研究』などがある。

◎勲五等双光旭日章 シテ方金剛流 廣田泰三氏。

◎紫綬褒章 劇作家・評論家 山崎正和氏。

◎京都府文化功労賞 観世流シテ方 浦田保利氏。

◎京都芸術新人賞 金剛流シテ方 廣田幸稔氏。

◎愛知県芸術文化選奨文化賞 名古屋狂言共同社。受賞理由「明治二十四年の設立以来、長年にわたり、当地域に伝承されてきた和泉流『山脇派』の台本と演技を継承し、活発な公演活動をするなど高い評価を得ている。また、能・狂言を通して、当地域の文化の発展に尽力するなど、本県の芸術文化の振興と向上に貢献し、今後もその活躍が期待される」。

◎一九九八年度(第55回)芸術院賞 第三部(音楽・演劇・舞踊) シテ方観世流 梅若六郎氏。能楽界に尽くした業績。

◎一九九九年度(第五十回)芸術選奨文部大臣賞(古典芸術部門) シテ方観世流 大槻文蔵氏。受賞の対象、大槻自主公演・能「撰待」、能劇の座公演・新作能「蛙ヶ沼」のすぐれた演技に対して。

◎芸術祭賞優秀賞(平成11年度) シテ方宝生流 本間英孝氏。

『本間英孝 能の会』での「隅田川」の、曲趣を充分に生かした、綿密かつ力強い演技に対して。

◎芸術祭賞新人賞(平成11年度) 狂言方大蔵流 野村萬斎氏。『伝統の現在 コクーン・スペシャル』の「藪の中」で、現代から中世世界を幻視する演出を手掛けた。

◎大阪芸術文化賞(平成11年度) シテ方観世流 大槻文蔵氏。同門の指導とともに、自主公演を企画して東西能楽師を招聘、低料金で良質のおもしろい能を提供して新しい観客層の開拓に尽力、また復曲活動を積極的に展開して、舞台人としてもとより、優れた企画力、強い指導力が受賞理由。

◎芸術選奨文部大臣新人賞 ワキ方下掛宝生流 森常好氏。受賞理由「着実に精進を重ね、常に安定した成果を挙げている。ことに「道成寺」(11月『花祥会』、シテ「関根祥人」など、ワキの使命であるコトバの強さ・明確さを駆使した演技に持ち味を発揮、さらに「清経」(12月『三鈴の会』シテ「浅井文義」)、「花筐」(12月『観世会』、シテ「野村四郎」など、近來風格も備わりつつあり、今後、一層の充実が期待される」。

芸術作品賞(邦楽)には、茂山千之丞氏らのハイパー「室町歌謡組曲」BASSARASSARA(フォンテック)が選ばれた。

◎芸団協芸能功労者(平成11年度)

狂言方大蔵流 大島寛治氏(一九二三年生まれ)。三世山本東次郎則重に入門、師事し、三世東次郎逝去後、当時二十代の青年であった現当主四世東次郎、則直、則俊の三兄弟を支え、狂言方として演能の維持、発展に尽くした。

◎第21回観世寿夫記念法政大学能楽賞

シテ方観世流 浅見真州氏。

早稲田大学教授 竹本幹夫氏(別記彙報参照)。

◎第10回催花賞

檜書店会長 檜 常太郎氏(別記彙報参照)。

能楽協会・日本能楽会関係

◎能楽協会

平成11年5月27日の能楽協会定時総会において、任期満了に伴う役員の改選が行われ、新役員が次の通り決定した。また今回新たに「九州支部」が増設された。

【役員構成】(以下、『会員名簿』平成12年版、社団法人能楽協会発行。平成11年12月1日現在による)。

《理事長》 片山九郎右衛門

《常務理事》 梅若六郎・坂井音重・武田志房・金春安明・

寺井良雄・廣田泰三・香川靖嗣・宝生閑・柿原崇志・山本則俊。

《理事》 浅見真州・守屋泰利・亀井保雄・松野恭憲・出雲

康雄・福王茂十郎・藤田六郎兵衛・鶴澤速雄・三島元太郎・

貞光義明・野村万之丞

《理事・東京支部長》 武田宗和

《同・名古屋支部長》 泉 嘉夫

《同・北陸支部長》 山田太佐久

《同・京都支部長》 片山慶次郎

《同・大阪支部長》 大槻文蔵

《同・神戸支部長》 藤井徳三

《同・九州支部長》 鷹尾祥史

《同・事務局長》 瀬山栄一

《監事》 栗谷菊生・檜 常太郎

【会員数】 一四一〇名

〔シテ方〕 観世流586 金春流119 宝生流133 金剛流86 喜多

流60 小計九八四名

〔ワキ方〕 高安流22 福王流19 宝生流29 小計70名

〔笛方〕 一噌流15 森田流47 藤田流5 小計67名

〔小鼓方〕 幸流29 幸清流9 大倉流17 観世流7 小計62

名

〔大鼓方〕 葛野流12 高安流14 大倉流12 石井流10 観世

流1 小計49名

〔太鼓方〕 観世流17 金春流28 小計45名

〔狂言方〕 大蔵流91 和泉流42 小計133名

支部別 東京627 名古屋92 北陸57 京都173 大阪223 神

戸60 九州128 本部扱(支部に属さない会員)50

◎日本能楽会

【役員構成】

《会長》 金春信高

《常務理事》 観世清和・野村四郎・宝生英照・金剛永謹・

喜多六平太・宝生 閑・金春惣右衛門・茂山千之丞。

《理事》 井上嘉久・大槻文蔵・高橋 汎・辰巳 孝・廣田陸

一・大島久見・福王茂十郎・一噌仙幸・寺井久八郎・幸清次

郎・宮増純三・亀井忠雄・山本 孝・観世元信・野村英丘

《監事》 藤波重和・一噌庸二

【会員数】 三九五名

〔シテ方〕 観世流184 金春流9 宝生流36 金剛流11 喜多

流18 小計258名

〔ワキ方〕 高安流8 福王流5 宝生流8 小計21名

〔笛方〕 一噌流6 森田流13 藤田流1 小計20名

〔小鼓方〕 幸流9 幸清流6 大倉流6 観世流1 小計22

名

〔大鼓方〕 葛野流5 高安流5 大倉流7 石井流4 観世

流0 小計21名

〔太鼓方〕 観世流6 金春流11 小計17名

〔狂言方〕 大蔵流26 和泉流10 小計36名

物故者

●佐々木勝輝氏

シテ方観世流。11年1月25日、吹田市の自宅で死去。大正11年3月15日香川県生まれ。二世観世喜之および三世喜之に師事。日本能楽会会員(昭和61年以来)。『観世』平成11年5月号に記事。

●川瀬 一馬氏

青山学院女子短期大学名誉教授。文学博士。書誌学者。平成11年2月1日、老衰のため東京都世田谷区の自宅で死去。享年93歳。東京文理科大学国文科の第一回卒業生。文化財審

議会専門委員等を歴任。昭和16年、生駒の宝山寺に眠っていた世阿弥自筆能本や書状ほか『風姿花伝』『花鏡』『至花道』『五位』『六義』など金春大夫家旧伝文書群を発見し、学界に紹介するなど、今日の世阿弥研究の礎を築いた。吉田東伍博士による『世阿弥十六部集』(明治42年刊)に次ぐ偉業である。主な著作に学士院賞に輝いた『古活字本之研究』『日本書誌学之研究』『世阿弥自筆伝書集』ほか多数。『宝生』平成11年3月号、『観世』平成11年4月号、『日本古書通信』第64巻第4号(平成11年4月)に追悼記事。

●岡 次郎右衛門氏

前名、治郎右衛門。本名、船越健一。ワキ方高安流。平成11年2月26日、老衰のため、入院先の京都の病院で死去。享年92歳。明治40年1月3日、京都に生まれる。九歳で叔父のワキ方高安流谷田民之助に入門。昭和22年、加賀藩お抱えワキ方で明治28年以来絶えていた高安流岡家の名跡を継承し、17世岡治郎右衛門豊康となり、披露能に「張良」を披いた。以後、ワキ方の主要曲を演じ、京都におけるワキ方の中心として九十歳まで舞台を勤めた。古格を湛えた、風情のある芸風で、京都のワキ方の要として無くてはならぬ方であった。日本能楽会会員(昭和40年以来)。勲五等双光旭日章(同57年)。京都府文化功労者(同61年)。平成3年には多年の功績に対し法政大学より催花賞が贈られた。『観世』平成11年5月号、『金剛』155号(平成11年5月号)、『能楽タイムズ』平成11年8月号に追悼記事。

●村瀬登茂三氏

ワキ方福王流。平成11年3月8日、脳内出血のため、入院先の病院で死去。享年90歳。明治41年8月31日、東京に生まれる。初め絵師を志し井川洗崖に入門し洗舟と号したが、洗崖の謡の師がワキ方野島信であった縁で、野島信に師事しワキ方の道に進んだ。初舞台は昭和18年「養老」のワキツレ。

最後の舞台は平成2年5月「経正」。昭和52年1月号から平成2年3月号まで『観世』の目次カットを担当し、能舞台の鏡板や中啓の絵柄の制作などに腕を揮うなど、能楽界に対する隠れた功績も大きい。『観世』平成11年5月号に追悼記事。

●松野 良輝氏

シテ方観世流。平成11年4月19日、肺炎のため、京都市上京区の病院で死去。享年88歳。明治43年9月18日京都市に生まれる。12世林喜右衛門に師事。昭和33年には京都観世会館建設の功績により表彰を受けた。日本能楽会会員(昭和50年以来)。『観世』平成11年7月号に追悼記事。

●栗谷新太郎氏

シテ方喜多流。平成11年5月21日、心不全のため狭山市の病院で死去。享年80歳。大正8年4月6日、美声で聞こえ、14世喜多六平太の名地頭といわれた栗谷益二郎の長男として東京に生まれた。栗谷家は広島浅野家お抱えの家柄で、父および14世喜多六平太、15世喜多実、友枝喜久夫に師事。長く喜多流の重鎮として重きをなし、能楽協会理事として能楽の発展に寄与した。日本能楽会会員(昭和40年以来)。

●善竹幸四郎氏

前姓、茂山。狂言方大蔵流。平成11年6月4日、心不全のため大阪高槻市の病院で死去。享年82歳。名人と称えられた善竹(茂山)弥五郎の四男。大正5年7月30日生まれ。父に師事。味わいのある飄々とした芸風で、太郎冠者物を得意とした。平成8年、多年の功績に対し法政大学より催花賞が贈られた。日本能楽会会員(昭和47年以来)。

●染谷 宗孝氏

シテ方観世流。平成11年7月5日、急性肺炎のため東京都中央区の病院で死去。享年83歳。大正4年12月16日生まれ。浅見重寿に師事。日本能楽会会員(昭和50年以来)。

●吉田 忠(督識)氏

吉忠株式会社、吉忠グループの名誉会長。平成11年7月9日死去。享年91歳。幼少より金剛流の謡をたしなみ、京都能楽養成会々長・金剛会会長など能楽関係諸団体の役員を歴任するなど京都能楽界の発展に尽力された。著書『離見―私と能とのふれあい』。『金剛』156号(平成11年9月)、『観世』平成11年10月号に追悼記事。

●畠山 敏夫氏

能楽評論家。11年8月20日東京の日本赤十字医療センターで死去。享年88歳。奈良県出身。東大法学部卒業後、裁判官に任じられ活動する傍ら、謡を広瀬政次に、大鼓を川崎九洲に習う。波竹利生の筆名で『能楽タイムズ』『金剛』などに寄稿した。『能楽タイムズ』平成10年10月号、『金剛』157号

(平成12年1月)に追悼記事。

●矢野 輝雄氏

沖縄県立芸術大学教授、沖縄芸能史研究家。11年8月23日、呼吸不全のため東京都目黒区の病院で死去。享年73歳。愛媛県出身。日本放送協会、沖縄放送協会に勤務。平成8年から沖縄県立大学客員教授。組踊りや琉球舞踊、能・狂言に造詣が深かった。著書に『沖縄芸能史話』『沖縄舞踊の歴史』。

『観世』平成11年10月号ほかに記事。

●青木祥二郎氏

シテ方観世流。平成11年9月10日、悪性リンパ腫のため、京都第二赤十字病院で死去。享年85歳。大正3年8月10日、長野県明科町生まれ。片山博通および九世片山九郎右衛門に師事。日本能楽会会員(昭和50年以来)。「能楽タイムズ」平成12年1月号に掲載の権藤芳一氏の文章が詳しい。

●指吸雅之助氏

ワキ方福王流。平成11年10月16日、胆管ガンのため、大阪堺市の病院で死去。享年73歳。大正5年7月3日、指吸富之助の三男として生まれる。15世福王茂十郎に師事。主に阪神方面で活躍。日本能楽会会員(昭和50年以来)。

●井上菊次郎氏

本名、重兵衛。前名、松次郎。狂言方和泉流。狂言共同社代表。平成11年10月18日、心不全のため愛知県長久手町の病院で死去。享年85歳。大正3年1月7日、二世井上菊次郎の次男として名古屋に生まれ、父および初世井上菊次郎に師事

する。狂言共同社は、明治24年に名古屋における旧宗家山脇和泉家系の芸統保持を目的として創立された結社。祖父および父の芸を受け継ぎ、名古屋の狂言師の第一人者として活躍した。一九九七年に松次郎を改め、菊次郎を襲名した。日本能楽会会員(昭和42年以来)。おおらかな老熟した芸風。仏具商。『能楽の友』395号(平成11年11月)にほか追悼記事。

●尾崎 宏次氏

演劇評論家。平成11年11月9日、膵臓がんのため東京都目黒区の病院で死去。享年84歳。『都新聞』(現、東京新聞)記者を経て評論活動に入り、戦前の築地小劇場から長く新劇を中心に幅広く活躍した。雑誌『悲劇喜劇』の編集にもかかわり、また能・狂言にも造詣が深く、健筆をふるった。

●勝部 全一氏

シテ方観世流。平成11年12月17日、心不全のため、三田高原病院で逝去。享年79歳。大正9年8月7日生まれ。井上嘉介および井上嘉久に師事。能楽協会大阪支部常議員を勤め、大阪府知事賞を受賞(平成二年)。日本能楽会会員(昭和50年以来)。

●関根 伸夫氏

シテ方観世流。平成11年12月17日、脳梗塞のため越谷市の病気で死去。享年67歳。昭和7年12月9日生まれ。関根直孝および関根祥六に師事。日本能楽会会員(昭和61年以来)。